

『心をつないで』

元号が、「平成」から「令和」になりました。

私は、新元号発表の瞬間は、テレビの前にいました。記者会見場に官房長官が現れるのを、少しドキドキしながら待っていました。「新しい元号は、『レイワ』であります」と聞き、正直なところ意外だなという感想を持ちました。自分としては、「ら行の漢字は使われないのでは」と予想していましたので。

「令」という漢字には、「言いつける。お達し」の他に、「よい。りっぱな」という意味があるそうです。海外向けには、「令和」の意味を“beautiful harmony”「美しい調和」と説明していることを、ニュース解説番組で知りました。

私には改元にかかわって、ちょっとした思い出があります。「昭和」から「平成」に変わった時、私は、中学3年生の担任でした。1月のことでしたので、生徒が受験する高校へ提出する「内申書」を作成していました。「内申書」に記載されている元号は、すでに「昭和」で印刷されていました。「新元号への対応はどうなるのだろう？」と不安を抱いていましたが、関係機関の素早い対応で、訂正の二重線とその上（下だったかもしれませんが）に「平成元年」が配置されたゴム印がまもなく届きました。そのゴム印を使って、「内申書」の元号の箇所を慎重に訂正しました。

私にとっては、初めての「内申書」作成だったので、間違いのないよう、かなりの緊張感を持って取り組んでいました。ですから、一人分を作成するだけでもけっこう疲れしました。それに加えて、元号の訂正です。何かしらの縁を感じた次第です。

さて、前置きが長くなりましたが、新学期が始まり1カ月余が経ちました。それぞれの学校では、昨年度のふり返りを踏まえて設定された目標の実現に向けて、教育活動が展開されていることと思います。

目標の実現のためには、教職員全員が、「なぜ、この目標になったのか？」「この目標の意味は何なのか？」「目標の実現のために、どうアプローチしていくのか？」等について、ちゃんと理解していることが重要です。それぞれの学級経営（主は授業です）が、分担された業務が、目標の実現に深く関わっているのだという意識を持つことがとても大事です。このような背景があるので、とりわけ年度当初の「学校便り」等では、「目標の実現に向かって全教職員が一丸となって・・・」とか「全教職員の心を一つに・・・」という表現を目にします。私自身も、これまで何かにつけてほぼ条件反射的に「一丸となって」や「心一つに」という表現を使っていました。みんなが同じ方向を向き協力していくことは、本当に大事なことなので。

ところが、校長1校目の時に、その考え方が少し変わりました。

ある年の学習発表会のスローガンを見た時からです。

スローガンは、子どもたちが作ります（担当者の適切な指導はもちろんあります）。スローガンには、その行事に対して「こう在りたい」という願いや決意が込められています。

その時のスローガンは「心をつないで、感動を届けよう！」でした。

私は、「おや？“心をつないで”」ではなく、「“心を一つに”ではないのか？」と違和感を覚えました。「なぜ、“心をつないで”なのか？」その意図をしばらく想像してみました。その結果、私は、次のような解釈をしました。

「人の心は、そう簡単には一つにならない。『心一つに頑張ろう！』などと言っても、それだけで同じ方向を向いて本気を出すわけではない。まして、あの子たちは、一人ひとりの個性が強い。それぞれが自分の考えを持っているし、日頃からよく意見がぶつかりケンカにもなる。でも、それぞれの気持ちがバラバラだと、感動を与えるような発表はできない。どうしたら感動を届けることができるのか。そこであの子たちは考えた。“一人ひとりが、思っていることは、ちゃんと伝えよう”そして、あの子たちなりの“納得”を見つけ出し、そこから前進する。どこかで、食い違いが出たら、そこでまた、伝え合って納得する。このような営みが大事なのだ。だから“心をつないで”なのだ」と。

「一丸となって」や「心一つに」という表現には、力強さや勢いが感じられ、読み手の受け止め方もいいと思います。しかし、一方で、一人ひとりの違いを無理にそろえるような強制感を私は覚えるようになりました。

学校経営においては、目標を職員と共有することは必要不可欠です（今は、職員に留まらず“保護者や地域の方々との目標の共有”が求められています）。

そのためには、職員一人ひとりに目標の必然性や意味等をきちんと理解してもらうことが大切です。「わかりやすさ」と「校長の本気」が鍵になると考えています。

また、目標実現に向け、意欲を持って仕事をしてもらうために、こまめに職員一人ひとりと意図的に会話をするのが大切だと考えます。とりわけ、「頑張っている」職員に対しては、即座に評価の言葉を伝えることが大切です。「〇〇、いいね。良かったよ」「ありがとう。助かってるよ」等、「認める・褒める・感謝する・価値付けをする」言葉を伝えるのです。また本人から、「その実践の動機」や「ふり返りのコメント（工夫、苦労、成果と課題）」等を聴きます。結果として「校長先生と話ができて良かった。これから頑張ります」という「満足感」や「次への意欲」を持ってもらえるような会話となることが肝だと押さえています。このような営みを通して、職員一人ひとりとの間に信頼感が醸成され、校長の考えが共感され浸透していくのではないかと考えています。

「人の心を一つに」していくためには、強いリーダーシップと意図的で良質なコミュニケーションが大事だなと感じています。至極当たり前のことなのですが、私の経験則の一つです。以後、学校便り等の文章には「全教職員の心をつなぎ、力を合わせて」という表現を使うようになりました。